

梅は、奈良・平安時代まで和歌に詠まれることが多かった花ですが、その後、和歌などに詠まれる花の代表は桜となってゆきます。

鎌倉時代に詠まれた、大本山永平寺を開かれた道元禅師の有名な和歌・・・

春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえて すずしかりけり

道元禅師はことさら梅の花を好まれていましたので、この花を梅と詠んだのかもしれませんが。

梅は、花を愛でる以外にその実を食べることが出来ます。代表的なものは梅干し。赤い物や青梅、乾燥して種を抜いた物や瑞々しい物、ハチミツに漬けたり、鯉節をまぶした物や、柔らかく大きい物からカリカリとした小梅などがあり、想像しただけで口の中が潤ってきます。毎日食卓にのぼるご家庭もあることでしょう。

禅宗寺院では、遠路はるばるやってこられた大切なお客様の疲れを癒して頂くために、砂糖や水飴、ハチミツなどをお湯で溶かしそこに梅干しを添えておもてなしをする作法があります。これを梅の湯と書いて梅湯（ばいとう）といいます。割り箸の先に半月状に切った梅干しを挟み、その梅干しで甘くしたお湯を混ぜて頂くのですが、相手の方に糖分と塩分と水分を補給して頂き、疲れを癒やしてもらうためのお作法です。

また、お茶の席や、日常においても、梅は和菓子などで、季節感を表したりするのに良く使われ、いち早く春の訪れを伝えてくれます。

このように梅は、単に花を愛でるだけでなく、その香り、食べ物としても、私たちの生活に親しみがあります。

道元禅師の著書『正しょう法ぼう眼げん蔵ぞう』の中に、梅を仏教の教えに例えた「梅ばい華か」という一巻があります。梅華の巻には、道元禅師の師匠である如にょ浄じょう禅師も非常に梅を好まれたことが書かれ

## 『 禅のこころ - 曹洞宗 - 』

---

ており、その中で如浄禅師は「修行している時に雪深い中、感じる梅の花と香りに、心が癒やされることもあるだろう。しかし、そこには只、花が咲いた梅の枝が一本あるにすぎない。」とお示しになりました。

それが、お釈迦さまが説かれた壮大な仏の教えの現れであると道元禅師は説かれています。

それを踏まえて先の道元禅師の和歌を読むと、四季の移り変わりすべてが仏さまの姿を現している。そう読めるのではないのでしょうか。

梅の花を見るとき、そこに仏さまの姿を思いたいものです。

— 終 —